

素 顔 拝 見

顎口腔インプラント治療部

松 崎 奈々香

顎口腔インプラント治療部の松崎奈々香と申します。素颜拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

新潟市西蒲区出身で山と田んぼに囲まれた自然豊かな地に生まれました。夏は川でザリガニを採って教室で育てたり、冬は友人と凍った川の上を散歩して下に落っこちて泥んこになったりしていた田舎の小学生でした。中学ではソフトテニス部に入り日焼けで真っ黒になって朝練から夜練までボールを追いかけて走っていました。

歯科医師である両親の影響もあり新潟大学歯学部48期生として入学しました。バンド音楽が好きでひそかに憧れていた軽音楽部にはなかなか勇気が出ず、友人に付いて行った弓道部とバドミントン部に先輩たちが優しいとの理由で入部しました。良い先輩、同期、後輩に恵まれ楽しい時間を過ごし、卒業した今でも大事な繋がりだなと感じます。4年生以降は国際交流サークルのネクサスに参加し、片言な英語でしたが留学生とお互いの国や大学について話し友人になれたことや、マル

メ・UBC・タマサート大学への短期留学の機会をいただき、そこで目にしたものはすべて新鮮でとても貴重な経験でした。

研修は部活の先輩からゴールドスタンダードを学べるよとの勧めもあり、歯科総合診療部Aコースを選びました。1年を通してライターの先生方に丁寧に指導いただいたことは自分の基礎になっています。その頃、またまた友人に付いて行った顎関節治療部（現顎口腔インプラント治療部）の説明会に参加し、今の私の師匠・メンターである荒井先生や高嶋先生とお会いし、インプラント・顎関節症・補綴と広く学べて面白そうと思い後期研修医として入局しました。ここで教わることはさらに新しいことばかりであっという間に月日が過ぎてもっと学びたい気持ちが大きくなり、同期よりも2年遅れて大学院に入学しました。

当医局ではインプラントと顎関節症を新患担当していますが、少し特殊で口腔外科、補綴科、歯科総合診療部、歯周病科の先生方にも参加していただき新患対応や症例検討会を行っています。様々な専門の先生の意見を交換しながら検討でき日々勉強になります。また、もう入学から10年以上の付き合いになる同期が大学院卒業メンバーは全員残っているので、すぐに会えて診療の相談ができたり、お互いの専門分野の情報交換ができることも良い刺激になっています。

本学に入学し現在に至るまで多くの尊敬する先生方に逢い今の自分があると感じます。まだまだな部分ばかりではありますが少しでも病院や学部へ貢献できるよう日々精進して参ります。学部生と会える機会はなかなかないのですが、新大研修コースを選んだ方は研修医でのインプラント研修でお会いできるのを楽しみにしています。



学位授与式

歯科矯正学分野

上 村 藍太郎

私は2006年入学の42期生ですので、出身の群馬から新潟に来て19年が経ちました。歯学部卒業後、研修医を経て大学院生として歯科矯正学分野に入局しました。入局後は「内因性カンナビノイド機構が関わる鎮痛メカニズムの解明」を研究テーマとして、痛みの研究に取り組みました。私たちが痛みを感じる仕組みは複雑で、痛みの増大、抑制に関わる様々な要因が絡み合っています。侵害情報が中枢に達すると痛みを感じますが、その一方で侵害情報は内因性カンナビノイド機構を活性化することで痛みを抑制します。学位研究では、神経障害性疼痛モデルマウスを使用して脳切片の免疫組織染色や行動実験を行い、口腔顔面領域において内因性カンナビノイド機構が関わる疼痛抑制機構について研究を行いました。内因性カンナビノイド機構は痛みを抑制しますが、グリア細胞は痛みの増大に関与します。そこで学位研究の継続テーマとして、「内因性カンナビノイド機構におけるグリア細胞の役割の解明」を目指して実験を行いました。大学院卒業後も研究を継続できたことは大変光栄なことでした。

大学の矯正臨床では、矯正単独治療のほか、顎変形症や部分矯正治療など様々な症例を経験しました。振り返ると、それぞれに難しさがあると感じています。歯が思うように動かない、歯の動きが予想と異なる、患者さんから十分な協力を得られないなどその要因は様々です。症例を重ねる中



2024年に開催された甲北信越矯正歯科学会のシンポジウムにて

で、治療法が一通りではない点が矯正歯科治療の難しさであり、また面白い点であると感じています。昨年行われた甲北信越矯正歯科学会では、スケレタルアンカレッジをテーマとしたシンポジウムでシンポジストを務めました。スケレタルアンカレッジの使用状況を振り返る中で、力学的コントロールの理解がスムーズな治療に不可欠であることを再認識しました。これまでは基本的手技の習得に精一杯でしたが、今後は歯の移動に関わるメカニクスの理解を深め、無駄のない効率的な治療を目指したいと考えています。

私の同期の多くは開業し、会う機会もめっきり減りましたが、たまに顔を合わせると学生時代の昔話で盛り上がります。私の学生時代は、西堀のロッジで焼肉を食べてからカラオケに行き、明け方に味濱家でラーメンを食べるのが定番でした。開業医になった彼らと話すとは私は新しいものに手を出しながらないタイプだと痛感します。時代の流れに取り残されないように、しかしながら大学で学んだ基本を大切にして、日々の臨床に取り組みたいです。



生体歯科補綴学分野

小 野 喜 樹

2025年4月1日付で生体歯科補綴学分野の助教を拝命いたしました、小野喜樹（おの よしき）と申します。このたび、「素顔拝見」の執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は長野県箕輪町です。箕輪町は四方を山に囲まれた、非常にのどかな町です。子どもの頃は、川遊びやカブトムシ採集など、自然の中で遊ぶことが日常でした。高校は地元の伊那北高校に進学し、柔道部に所属していましたが、臆病な性格で人を投げることができず、引退まで他の部員に投げられ続けるサンドバック役に徹し、常に体はアザだらけでした。

2012年に新潟大学歯学部に入局して48期生として入学しました。48期は現在でも15名もの先生方が新潟大学に在籍しており、いまでも毎年みんなで温泉旅

行に行くほど仲が良かったです。私は、6年間硬式庭球部に所属し、テニス漬けの日々を送りました。中でも毎年千葉県白子町で開催されるオールデンタルでは、真っ黒になるまで日焼けしながら、仲間とともに勝利（とその後の勝ち酒）を目指して全力を尽くした日々が今でも最高の思い出です。

卒業後は、「うちに入れば死ぬほど臨床やらせてやるぞ」という魚島勝美教授の熱いお言葉に心を打たれ、生体歯科補綴学分野の大学院に進学しました。実際の大学院生活では、臨床・研究・教育すべてに積極的に取り組む必要があり、大変に感じることも多くありましたが、それ以上に充実した濃密な4年間を過ごすことが出来ました。特に、指導医である加来賢先生の御指導のおかげで、臨床や基礎研究に楽しさを見いだせたことが、大きなモチベーションにつながりました。私は歯根膜再生に関わる研究に携わっておりますが、特に嬉しかったのは、自身の学位論文が『Journal of Dental Research』に掲載され、同誌の表紙にも採用されたことです（2025年2月号）。大学院時代、質の高い組織標本作製に多くの時間を費やして苦労したこともあり、組織標本の質の高さについても認めていただけたことに大きな達成感を感じました。今後も最終目標である

「歯根膜再生」の実現に向けて、研鑽を積んでまいりたいと思います。

私の趣味は「アルビレックス新潟」です。週末には、ホーム・アウェイ問わずスタジアムに足を運び、チームと共に戦っております。現在、アルビレックス新潟はJ1最下位（2025年7月現在）という苦しいシーズンを送っておりますが、必ずや残留を成し遂げると信じ、私も全力で後押しをしたいと思います。

最後になりますが、まだまだ未熟者ではありますが、生体歯科補綴学分野のみならず、新潟大学歯学部発展に貢献できるよう、精進してまいります。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



IADR2025（バルセロナ）にて（筆者は一番左）